

## 農水省から酪農家へ 牛とともに生きるために



田島牧場を開業7年目の田島あゆみさん（安芸高田市高宮町）

広島県の山あい、島根県との境に位置する安芸高田市高宮町で、家族で酪農を営む田島あゆみさん（40）を訪ねました。以前は農林水産省畜産局に勤めていましたが、退職後、2019年に新規就農して7年目です。スタートは「一人酪農」でしたが、今では夫の宮口守さん（38）と4歳の双子と2歳の3男に恵まれ、育児をしながら牧場を営んでいます。廃業となった牛舎と農地1.5haを引き継いで、搾乳牛は25頭です。

## よい経営とは数字ではなく牛の健康

あゆみさんが酪農と出会ったのは30歳、牛乳・乳製品課に配属になり、北海道中標津町へ牧場研修に行ったときでした。家族経営の牧場でしたが、牛にストレスをかけないように大切に扱う酪農家夫婦を見て、目から鱗が落ちる思いをしたそうです。「良い経営のためには、牛を健康に飼うことが一番根底にあると知っ

て、ハッとさせられました。機械や設備も大事ですが、まず牛をしっかり管理して一頭一頭のパフォーマンスを上げるのが重要で、むやみに大規模化しなくても家族経営でやっていけるんだと知りました。結局その2年後に退職し、酪農家になりました」。その後、ふるさと広島の牧場で1年の研修を経て、いまの牧場に巡り合い、現在は姉に続いて新規就農した弟の田島俊介さん（38）も週に1度牧場を手伝っています。

牧場の前には基盤整備した約30haの大きな畑が広がっています。この集落も昔は十数戸で酪農をしていたそうですが、今ではうちとあと1戸だけになりました。その牧場と協力して今、2haで牧草を作っていて、来年は自給飼料4haにする予定です。あとの畑は農業法人が、ハンバーガーチェーンのレタスを生産していましたが、運送費の上昇でコストが合わなくなり、一面ネギ畑に変わりました。





あゆみさんと夫の宮口守さん。古い民家を活かした牛舎から裏山に自由に入出入りする育成牛たち

## 裏山に放牧地をつくり、育成牛を放つ

1年前、牛舎の裏山を造成して放牧場をつくりました。守さんが重機で山から土を運んで、牛の通り道を付けました。昔は畑でしたが、長年放棄されていたところを抜根して整地し、シバのタネをまきました。自給飼料で支出を減らす工夫はしていますが、機械や設備の更新が重なり、厳しい面もあるそうです。改めて、人生の選択と今の暮らしについて伺いました。

―農水省キャリアから一転、今は充実していますか？

公務員をやめて、酪農家になったことは本当に良かったです。農水省の仕事自体はやりがいがあったんですけど、どうしても書類だとか数字が多く、私の場合は今のように現場が見えていなかった。今は、牛1頭1頭の動きを見て、牛乳1リットルを実感して仕事ができ、視野も広がったのはよかったです。

―生産者の立場になって見たものがあるんですね。

生きている実感があるのが現場仕事のよさです。牛を見ていて歩かせてあげたいと思ったので放牧を始めました。経営の方向性を自分たちの責任で決めていけることはすごく楽しい。農業は全部自分で考えて自分で作るおもしろさがあり、暮らしは充実してます。ただし、経済的なことは別ですが（笑）。

―やはり厳しいですか。広島県全体でも酪農家は88戸になったそうですね。

酪農に限らず農業全体の課題は、努力が報われない虚しさですね。独立した2019年は、まだ相場が良く、就農1年目の手取りは良かったんです。その後、酪農家として技術が磨けてレベルアップしているはず

なのに、収入はどんどん落ちる一方です。自分の能力ではなく相場に左右されるというのは、仕方ないとはいえ虚しさがつきまといますよね。

―外部要因に左右される構造に根本的な問題があると思いますが、さて、どう乗り越えればよいのでしょうか？

酪農ヘルパーさんもないんですよね。うちに来ていた30代の人も、子どもとの時間が取れないと言ってやめてしまいました。働き方として無理があるんでしょうね。うちでは、子どもとの時間をとるために、朝の搾乳は4時―7時、夕方は午後3時―6時にしています。牧場は楽しいし、やりがいはあるけれど、経済面や休みの問題から、自分たちの人生の幸せを考えたとき、酪農に固執する意味はあるのかと夫婦で話し合っています。

―仕事ではどんな時に幸せを感じますか

特別なことではないんですが、病気の牛が一頭もいなくて、おだやかなことがいちばん幸せですかね。牛は飼いたいので、10年後は、頭数を減らして放牧酪農をするか、和牛の繁殖で山に放牧して他の仕事もするとか。田舎は人がいなさ過ぎて、フォークリフトに乗れると、いい収入になるんですよ。何か勉強して、農業について書いたり発信する仕事も考えたいと思っています。

足元の土を耕して草を作り、牛を放ち、生産者として生きる。10年後を明るく冷静に語ってくれましたが、こういう賢くて若くやる気のある家族が、酪農家としてむらに生き残り続けるには、外部要因に翻弄されない酪農へ、方向転換の時ではないかと感じました。